第37表　　業態別身長体重の対前年の増減

年令	生産者世帯		消費者世帯	
	身長	体重	身長	体重
	cm	kg	cm	kg
1	+ 0.6	− 0.11	+ 0.3	− 0.09
2	+ 0.9	+ 0.14	+ 0.2	− 0.03
3	+ 0.5	− 0.29	+ 0.6	+ 0.17
4	+ 0.5	+ 0.14	+ 0.8	+ 0.14
5	0	+ 0.18	+ 0.8	− 0.07
6	− 0.2	− 0.06	0	− 0.04
7	− 0.3	+ 0.18	+ 1.2	− 0.12
8	+ 0.9	+ 0.20	0	− 0.08
9	+ 0.6	+ 0.12	+ 0.3	+ 0.04
10	0	+ 0.16	+ 0.9	+ 0.58
11	+ 0.6	+ 0.08	+ 0.9	+ 0.62
12	+ 0.6	+ 0.10	+ 2.1	+ 1.18
13	+ 2.1	+ 0.02	+ 0.3	− 0.20
14	+ 1.2	+ 0.94	+ 0.9	+ 0.72
15	+ 0.9	+ 0.20	+ 0.6	− 0.02
16	− 0.9	− 0.66	− 0.6	− 1.18
17	+ 1.2	+ 1.72	+ 0.9	+ 0.74
18	+ 0.9	+ 0.66	+ 1.2	+ 0.20
19	− 0.3	− 0.74	0	+ 0.40
20	− 0.9	− 0.22	+ 1.2	+ 0.40

件等が異なるため，それぞれ違つた体型を形造つている。

6. 歯牙異常

歯牙異常は昭和27年度から毎年栄養欠陥調査と同時に行われているもので，欠損歯およびう歯の二つに分けて調査している。このうち欠損歯については昭和33年まではその定義も簡単で乳歯から永久歯への交換期以外の時期に明らかに欠損している歯は，すべてこの中に含まれていたが，本年度より抜去された永久歯だけをさし，乳歯，智歯の場合は例え抜去しても欠損歯の中に含まないことにしたので，33年度以前のものと直接比較できないうらみがある。しかしう歯については年次比較も可能であるので以下主としてう歯についての調査の概要を記してみよう。

第38表　　う歯の年次別発現率　　（5月調査）

年度	有症率		1人当り本数	
	男	女	男	女
29 年	59.6	65.6	4	5
30 年	60.8	66.7	4	5
31 年	67.3	72.2	5	6
32 年	69.1	73.5	5	6
33 年	71.5	75.9	5	6
34 年	71.9	76.5	5	6

1) 年次別発現率

歯牙疾患の全国調査は戦前には行われなかつたため，これとの明確な比較はできない。しかし日本および諸外国の研究によると，戦時中は何れもう歯の発生率は低下するが戦争が終了し，食糧事情の回復，特に砂糖の消費量が増加するのとほぼ平行して再び上昇するといわれている。

国民栄養調査によるう歯の発生状況をみても，27年より増加する傾向があり，全国平均の行われた29年からの年次推移と比較してみると，まず平均値では有症率すなわち，う歯を少くとも１本を有している人の割合は29年には男子59.6%，女子65.6%であつたが，31年には67.3%，72.2%，33年は71.5%，75.9%と年々増加の一途を辿り，34年度も前年に比し，男子0.6%，女子0.8%と増加し，それぞれ71.9%，76.5%となつている。

また１人当りのう歯の数については29年度に男子４本，女子５本となつていたが，31年度から男女ともそれぞれ１本づつ増加し５本，６本となり，それが現在までも続いており，34年の調査においても平均男子５本，女子６本となつている。ただこのう歯は処置歯，未処置歯にわけて調査してないので，この中何%位が治療されず放置されているかについては明らかでない。

2) 性別，年令階級別発現率

次に性別，年令階級別にう歯の発生状況をみると，殆んどすべての年令層において女子の方の有症率が高く，特に25～39才においては男女に10%以上の差がある。ただ５～９才においては男子の方が若干高い。

次に年令別に有症率をみると，最も高い年令層は５～９才で男子88.9%，女子90.8%と100人中約90%がう歯を有しており，全く正常なものは僅かに10%前後という状態である。10～14才になると有症率は若干下り15～19才で最低となり，それ以後はまた年令とともに増加する。

一旦，う歯となつたものは治療を行つても処置歯としてやはりう歯の中に含まれるので，う歯の発生率は年令が増しても減少する筈はないが15～19才で最低になるのは，一旦う歯になつた乳歯がこの年令までにすべて入れ換つて永久歯になるためである。

すなわち乳歯は５才位から抜け始め15才までに全部抜け変つてしまうので５才以後15才までのう歯の発生率は乳歯と永久歯とが混同したものである。また１人当りのう歯の本数は５～９才で男女とも６本であり，10才以後になると３本まで減少するが，それ以後年令とともに上昇し，40才以上で男６本，女７本となる。これは上下32本のうち20%程度がう歯になつていることを示している。なお２～４才では，有症率が男子61.3%，女子62.3%，１人当りの本数が男女とも５本となつている。この時代にはすべてが乳歯であるため，たとえう歯となつてもいずれも抜け変るからと簡単に考えられ易いが，う歯を有している場合にはそしやく力がおち消化吸収能にも悪影響を及ぼすので充分の注意が必要であろう。

次に年次別う歯発生率の年次推移をみると，昭和30年までは年令のとり方が異つているので今回のような区分を行つた昭和31年度からの４カ年について比較してみると，まず有症率では各年令とも年々う歯の

第39表　　う歯の性別年令階級別発現率　　34年５月

		平均	2～4才	5～9	10～14	15～19	20～24	25～39	40才以上
有症率	男	71.9	61.3	88.9	69.8	56.7	61.5	74.8	72.3
	女	76.5	62.3	90.8	75.2	63.6	71.1	85.2	72.1
1人当り本数	男	5	5	6	3	3	3	5	6
	女	6	5	6	3	3	4	7	7

第40表　　う歯の業態別発現率　　34年5月

		男	女
生産者世帯	有症率	71.9	75.6
	1人当り本数	5	6
消費者世帯	有症者	72.2	77.3
	1人当り本数	5	6
その他の世帯	有症率	68.8	75.1
	1人当り本数	5	6

発生率が増加しているが20才以上になると相違がない。これは終戦後に生れた児童，青少年のう歯発生率が増加したためであるが，この傾向が乳歯のみでなく永久歯においても同様な状態になるか否か今後の動向が注目される。

なおう歯の1人当りの本数は31年度の時と変らず結局，う歯を有する者の増加が顕著であるのに反し，う歯そのものの本数にはそれ程の差がないことになる。

3) 業態別発生率

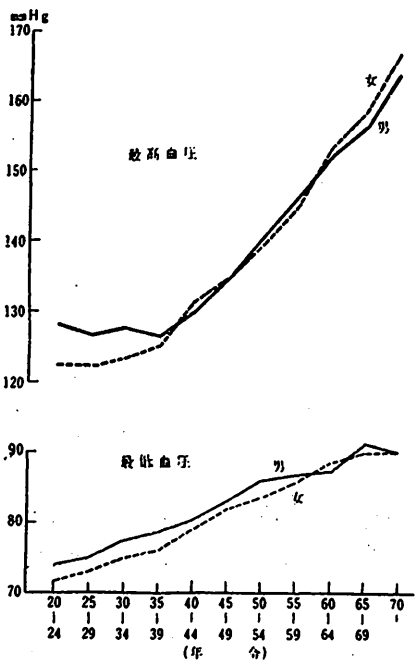
次に34年度のう歯の発生率を各業態に分けて観察してみると，有症率の平均値では，消費者世帯の男子72.2%，女子77.3%に比し，生産者世帯はそれぞれ71.9%，75.6%と若干低く，その他の世帯は更にこれを下回つている。

各年令区分によりみると，一般に消費者世帯の方が高いが，ただ5～9才においては男女とも生産者世帯の方が3～5%多く，またその他の世帯は各年令とも大体生産，消費の両世帯を下回つている。

7. 血　　圧

血圧については昭和31年度より20才以上の男女について調査を行つているが，33年度に血圧区分を従来の101～110，111～120から100～109，110～119の如く変えたので，平均値はやや高くなり，直接推移を比較することはできないから，今回は34年度の調査結果についてのみ記述する。又，血圧のうち最低血圧については，従来エツチンゲルスワン氏聴診点の第4点を測定していたが，34年度より第5点をとることにした。これにより最低血圧の値が多少変るのではないかと想像されたが33年度と比較して殆んど差が見られなかつた。

第18図　性別血圧平均値の比較



性別・年令階級別平均値

まづ性別，年令階級別にみると最高血圧，最低血圧とも年令とともに増加しているが，その増加率は最高血圧の方が大きく60～64才になると，男女とも高血圧と考えられる150 mmHg 以上となり70才以上になると更に増加し，女子では170 mmHg 以上に達する。これに対し，最低血圧では年令による上昇率は小さく65～69才で90 mmHg 以上となり，70才以上になつても，それ程の増加はみられない。又性別にみると最低血圧では一般に男子より女子の方が低いが高令者の最高血圧は女子の方がかえつて男子よりも高いことが注目される。

次に全国男子の最高血圧について20才代，40才代，60才代の別に血圧の分布状態がどのようになつているかをみてみると，20才代では120 mmHg を頂点とした正規分布に近い曲線を描いているが，40才代，60才代と年令の増加するに従つて，その山